

多賀城市文化財調査報告書第116集

多賀城市内の遺跡 1

—平成23年度発掘調査報告書—

市川橋遺跡第82次調査

平成 26 年 3 月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。このことから当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用することはもとより歴史の解明に資する調査に努めているところです。

本書は、平成23年度に本市の単独事業として実施した市川橋遺跡第82次調査の成果を収録したものです。今回調査を行った総合公園である多賀城市中央公園は、多賀城跡の南正面に位置しており、これまでの4度にわたる調査において、古代のメインストリートである南北大路や、それと交差する北2道路などを発見しております。

今回の調査では、南北大路の西側にあたる場所において大型の掘立柱建物跡を再発掘し、大路に隣接した地区の景観について新たな知見を得ることができました。また、大路から西に離れた調査区では、畠跡と考えられる小溝群を発見し、古代における土地利用のあり方について確認することができました。

いずれも小規模な調査でしたが、このような成果の積み重ねが、本市の具体的な歴史像の解明につながり、ひいては新しいまちづくりに活用できるものと期待しています。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成26年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

- 1 本書は、平成23年度に市単独事業で実施した市川橋遺跡第82次調査の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いている。今回の調査では、第11・75・78次で発見した遺構を再発掘し、遺構の輪郭を再実測している。掘立柱建物跡については、個々の柱穴の図面は第75・78次調査のものを用い、今回作成した遺構配置図に合成した。
- 4 挿図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 本書の執筆・編集は小原一成が行った。図版作成等は、小原のほか四家礼乃、高橋純平、村上詩乃、宮城ひとみ、村上和恵がおこない、遺物の写真撮影は板垣泰之と村上詩乃と城口貴彰が担当した。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

調査要項

1 調査名	市川橋遺跡第82次調査					
2 所在地	多賀城市市川字館前地内					
3 調査期間	平成23年11月8日～12月7日					
4 調査面積	260m ²					
5 調査主体	多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾					
6 調査担当	多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 鈴木典男					
7 調査担当者	多賀城市埋蔵文化財調査センター 副主幹 武田 健市 研究員 相澤 清利 村松 稔 小原 一成 調査員 鈴木 琢郎 四家 礼乃 畠山 美津留 高橋 純平					
8 調査協力者	多賀城市役所建設部道路公園課 株式会社遠藤工業					
9 調査従事者	大江かおり 小川 勝彦 加藤 克夫 菊地 清喜 西條 金三 佐々木奈美 重泉 昌志 平塚 孝志 渡邊 祐子					
10 調査従事者	丑田 明希 菅野 良子 佐々木清子 千葉 都美 宮城ひとみ 村上 和恵					

凡例

- 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
SA : 柱列跡 SB : 掘立柱建物跡 SD : 溝跡 SI : 壁穴住居跡 SK : 土壙
Pit : 柱穴及び小穴 SX : その他の遺構
- 奈良・平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』(多賀城市教育委員会 2003) で報告している。
 - (1) 土師器坏
A類 : ロクロ調整を行わないもの
B類 : ロクロ調整を行ったもの
 - B I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
 - B II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
 - B III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
 - B IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
 - B V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - (2) 土師器甕
A類 : ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器坏

I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政庁跡 図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、「多賀城跡 政庁跡 本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方と、『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日条にある「出羽國言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方がある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。

目 次

I 遺跡の地理的・歴史的環境.....	1
II 調査に至る経緯と経過.....	4
III 調査成果	5
IV ま と め	26

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央、仙台市の北東側に位置する。東西7.6km、南北4.2km、周囲29.9kmの規模であり、東側は貞山運河を境界として七ヶ浜町、北西側は加瀬沼を隔てて利府町、北側は塩竈市、南から西にかけては仙台市と隣接する。

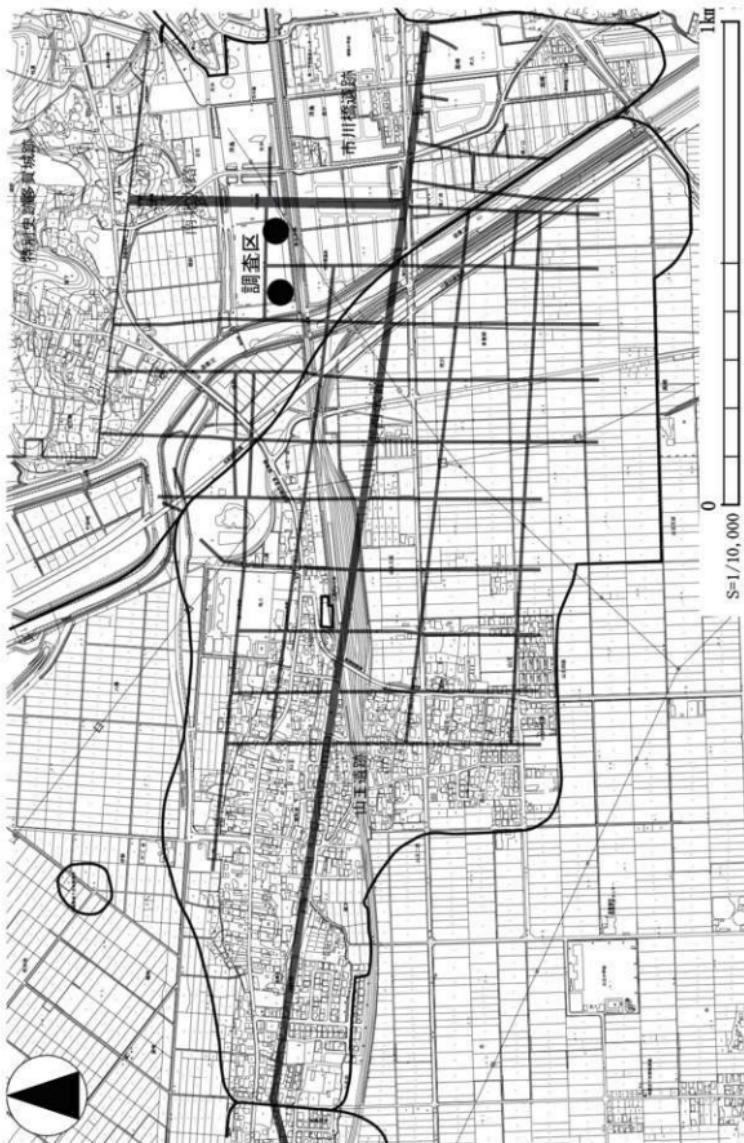
市内の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在しており、その面積は市の面積の約4分の1に及ぶ。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上には八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

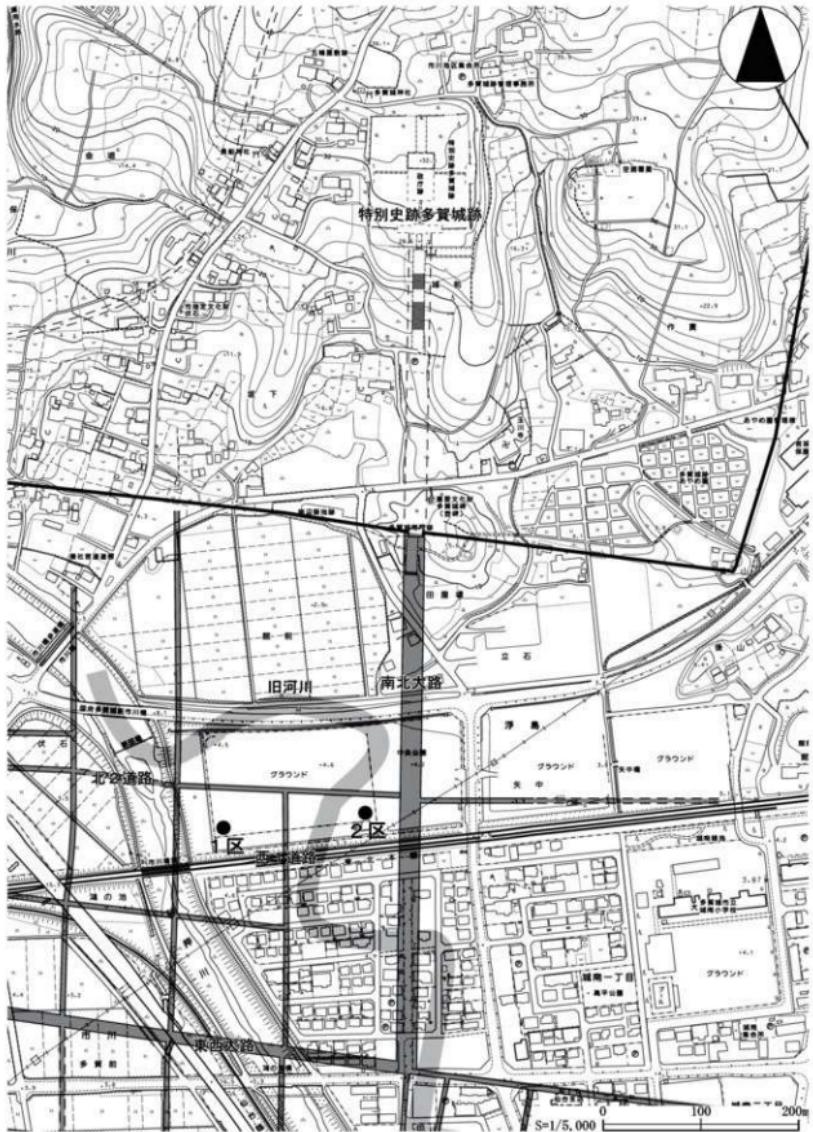
本遺跡の北側の沖積地から丘陵部にかけては特別史跡多賀城跡、東側の丘陵部には多賀城廃寺およびそれをとりまくように高崎遺跡がある。多賀城は奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれたところであり、奈良時代には鎮守府も併せ置かれるなど、律令政府による東北地方経営的一大拠点である。多賀城廃寺はその付属寺院であり、高崎遺跡はそれらと同時代の集落跡と考えられている。また、北側の小丘陵上には館前遺跡(特別史跡多賀城跡に追加)があり、国司館あるいは城外官衙と考えられている。一方、本遺跡西側の微高地上には山王遺跡、さらにその西側には新田遺跡があり、いずれも奈良・平安時代の集落跡と考えられている。このように、多賀城跡周辺には同時代の寺跡や集落跡が広く展開しており、大規模な遺跡群を形成している。

市川橋遺跡は、市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川東岸に形成された、標高2～3mの微高地上に位置しており、遺跡の範囲は東西約1,100m、南北約750mに達する。これまで本市教育委員会をはじめ、多賀城跡調査研究所、宮城県教育委員会によって発掘調査が行われ、道路跡、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、井戸跡、区画溝など多数の遺構が検出されている。道路跡は、多賀城政府中軸線上に造られた南北大路と多賀城外郭南辺築地に平行する東西大路を基準とし、これらの道路に沿って1町四方に区画された方格地割りを形成している。本遺跡南半部はこの幹線道路の交差点にあたり、周辺では規則的に配置された大規模な建物群や四面庇付建物が発見されるなど、城外で最も重要な地区であると考えられる。この方格地割り内では河川跡も検出しており、多数の土器類のほか、人面墨書き土器や木製形代といった祭祀具が出土し、まじないの場であったことも判明している。さらに多賀城外郭西門の約150m南西に位置する中谷地地区では、9世紀から10世紀前半にかけての土葬墓が発見され、墓域の存在も明らかになってきている。

今回の調査区である多賀城市中央公園は、これまで4次にわたり発掘調査が行われている。第11次調査



第1図 古代の方格地割と調査区の位置



第2図 調査区位置図

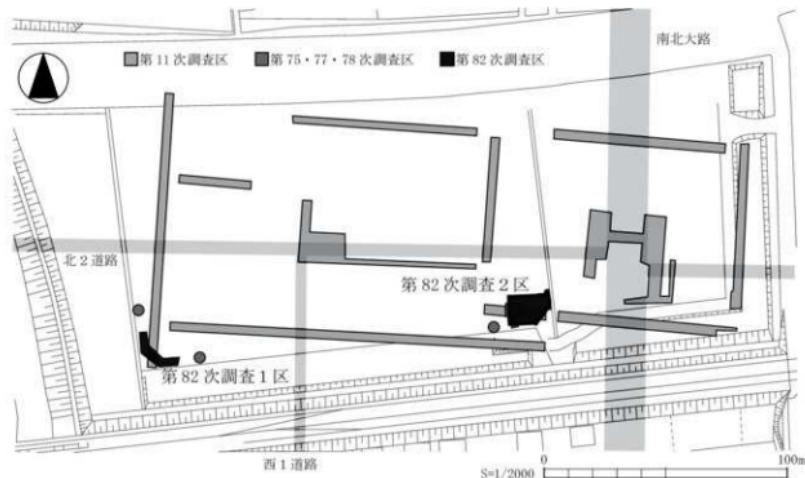
は平成4年度に実施した中央公園建設に伴う確認調査である。12箇所の調査区を設定し、南北大路や北2・西1道路など方格地割りに関わる道路跡を発見したほか、掘立柱建物跡9棟、柱列跡2条、堅穴住居跡12棟、井戸跡1基、瓦組み暗渠1条、円形周溝遺構1基及び多数の柱穴、溝跡、土壌が発見されている。

第75・77・78次調査は、平成21年度に実施した中央公園施設整備に伴う確認調査である。特に、第78次調査では、第11次調査9区で発見した大規模なSB470掘立柱建物跡の広がりを確認することができた。

これらの調査により、中央公園東側には南北大路が、中央には北2道路があり、西1道路が北2道路から南側に延びていることが明らかとなっている。今回の調査における1区は、「北2西2区」の中央北寄りに位置し、2区は「北1・2西1区」の北東隅に位置している。また、1区がNo.3トレンチ、2区がNo.9トレンチと重複し、平成21年度の第75・78次調査と2区の西側が重複している。

II 調査に至る経緯と経過

本件は、平成22年度中央公園施設整備計画に係る本発掘調査及び確認調査である。平成22年12月22日に事業者より当該地における中央公園施設整備と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。計画では、クレー舗装工事で11,900m²の範囲を25cmの掘削、本部席用上屋設置で幅70cm、最深65cmの掘削を4箇所で実施、バックネット設置で幅1.4m、最長1.4m、最深1.4mの掘削を計21箇所で実施することとなっていた。これまでの調査において、中央公園では約1.5mの盛土を確認していることから、クレー舗装工事と本部席用上屋設置工事については工事立会、バックネット設置工事については埋蔵文化財への影響が懸念されたことから本発掘調査を行うことに決定した。



第3図 第82次調査区の位置と周辺の調査位置

その後、3月11日の東日本大震災により平成22年度中央公園施設整備事業を中断せざるを得ない状況になり、平成23年度に改めて協議を行うこととなった。平成23年10月28日に打ち合わせを行い、バックネット設置工事に関する調査の方法について協議を行った。特に、東側のバックネット部分について、①南北大路に近接し、重要な遺構が多いと予想されること、②市川橋遺跡第75・78次調査の調査区と重複させて調査を行い、東日本大震災前後の座標のずれを確認したいことから、バックネット設置予定範囲を南北と東西として、10m×10m程度の調査区を設定したい旨を提案し、承諾を得た。その際、バックネット設置予定範囲は本発掘調査、それ以外の範囲は確認調査を実施することとした。

調査は11月8日から開始し、西側調査区（1区）から重機で掘削を開始した。11月9日には1区の掘削を終了し、遺構の検出を始めた。東側調査区（2区）の掘削は11月9日に開始し、11月11日に終了した。11月18日に2区の遺構検出状況の写真撮影を行い、遺構の精査と図面・写真による記録を進めた。12月2日には1区の遺構検出状況の写真撮影を行い、遺構の精査と図面・写真による記録を進めた。12月2日中には全ての記録を終了し、12月7日までに全ての機材等を撤去し、調査を終了した。

III 調査成果

1 層序

今回の調査では、表土以下4層の堆積を確認した。このうち、I・IV層は1・2区ともに認められ、II・III層は1区のみで確認した。

I層 現代の堆積層であり、2層に細分することができる。

I1層 造成に伴う盛土層で、厚さは約1.5mである。

I2層 造成前の旧水耕作土で、厚さは10～15cmである。

II層 1区のほぼ全域に堆積するIII層に比べて黒みが強い色調の黒褐色粘質土層で、厚さは4～8cmである。

III層 古代の堆積層であり、2層に細分することができる。

III1層 1区のほぼ全域に堆積する炭化物を多く含む暗褐色粘質土層で、厚さは12～26cmである。古代の遺構検出面である。

III2層 1区の西側に部分的に堆積するIV層の灰黄褐色砂をブロック状に多く含む暗褐色粘質土層で、厚さは2～3cmである。古代の遺構検出面である。

IV層 1・2区の全域に堆積する灰黄褐色砂である。1区における古代の最終遺構検出面であり、2区の遺構は全てこの層上面で検出した。

2 1区で発見した遺構と遺物

1区では、III1層上面で溝跡2条、土壤8基、III2層上面で小溝群1基、性格不明遺構1基、IV層上面で溝跡7条、小溝群1基、土壤2基を発見した。以下、古い順に報告する。

IV層上面検出遺構

S B3538掘立柱建物跡（第6・8図）

【位置】調査区北西隅で発見した2基の柱穴(P1・2)から推定した掘立柱建物跡である。南側では同規模の柱穴が検出されていないことから、北側に展開すると考えられる。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】P1で柱抜取り穴を確認した。

【方向】柱筋の方向は不明であるが、P1掘方の東辺とP2掘方の西辺が北で約15度東に偏していることから、この方向に傾く建物跡であった可能性がある。

【掘方の平面形・規模・埋土】P1の平面形は隅丸方形であり、規模は東西1.1m、南北76cm、深さ66cmである。掘方埋土は2層に分けることができる。2層はIV層の灰黄褐色砂をブロック状に多量に含む灰黄褐色砂質土である。3層は黒褐色粘土である。P2は大部分が調査区外のため詳細は不明であるが、平面形は隅丸方形と考えられる。

【柱抜取り穴の形状・規模・埋土】P1の柱抜取り穴は掘方の上部を大きく壊すように認められ、埋土である1層は、IV層の灰黄褐色砂や黄褐色土のブロックや炭化物を多く含む暗褐色ないし黒褐色土である。

【遺物】出土していない。

S D3461溝跡（第5図）

【位置】調査区中央に位置する南北方向の溝跡であり、南側は調査区外に延びる。

【方向・規模】方向は北で約11度東に偏している。規模は長さ1.1m以上、上幅21cmである。

【遺物】出土していない。

S D3462溝跡（第6図）

【位置】調査区中央に位置する南北方向の溝跡であり、北側は調査区外に延びる。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏している。規模は長さ1.2m以上、上幅41cmである。

【遺物】第14図-1に示した須恵器長頸瓶のほか、土師器高台付壺・甕（B類）が出土している。

S D3463溝跡（第6図）

【位置】調査区中央に位置する東西方向の溝跡であり、西側は調査区外に延びる。

【方向・規模】方向は東で約27度南に偏している。規模は長さ1.7m以上、上幅18cmである。

【遺物】出土していない。

S D3466溝跡（第5図）

【位置】調査区東側に位置する東西方向の溝跡である。

【重複】S D3467・3468よりも古い。

【方向・規模】方向は東で約4度北に偏している。規模は長さ42cm以上、上幅20cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に多く含む暗褐色土である。

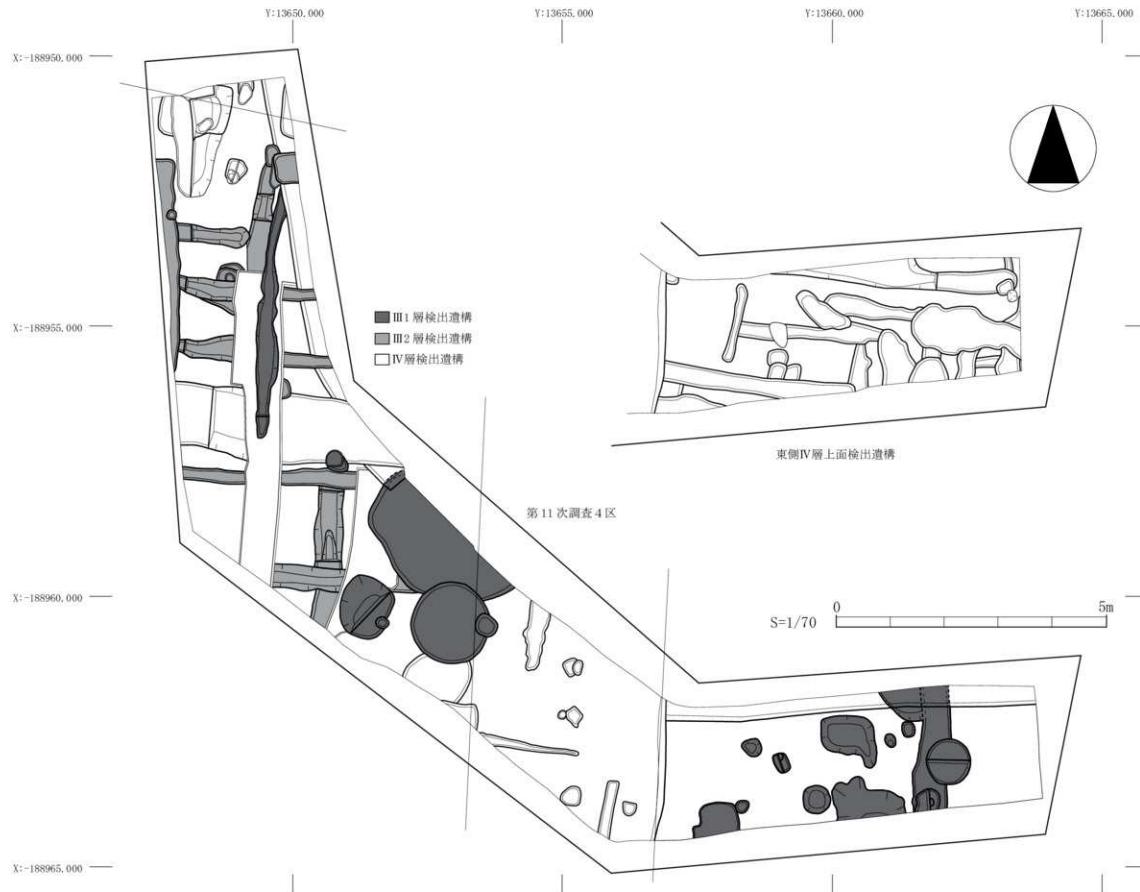
【遺物】出土していない。

S D3484溝跡（第6・8図）

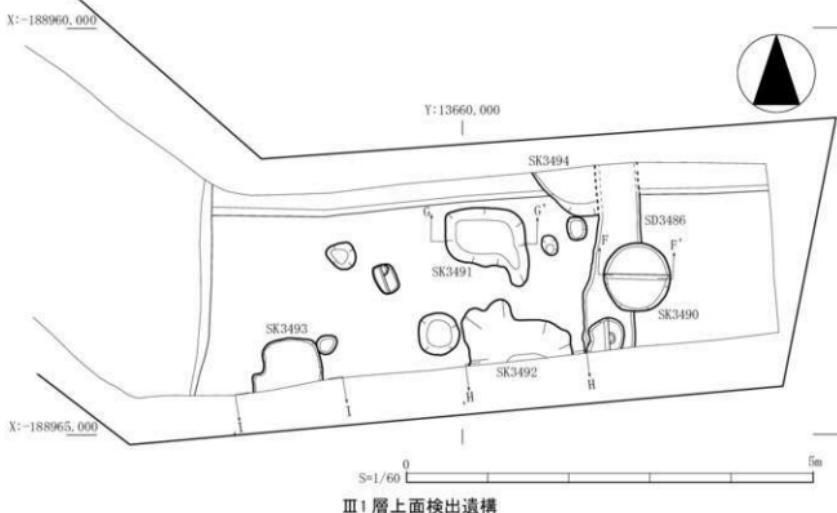
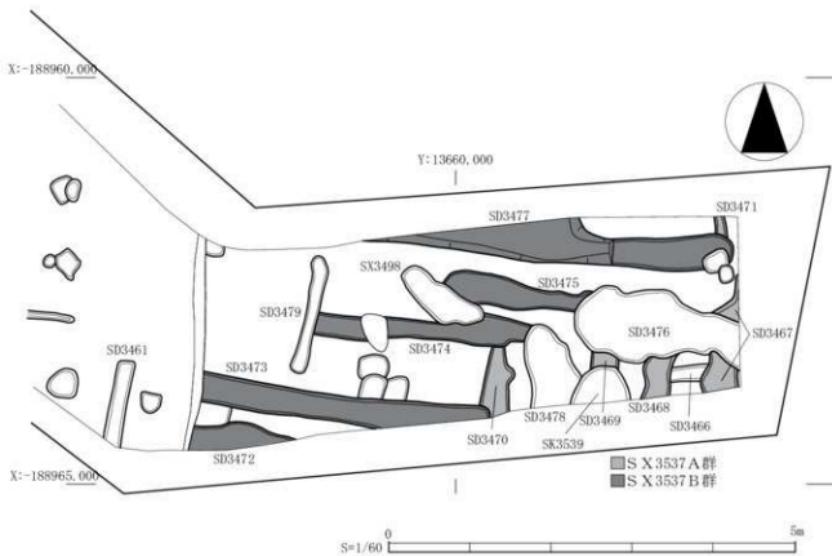
【位置】調査区西側で発見した東西方向の溝跡であり、東側と西側は調査区外に延びる。

【方向・規模】方向は東で約8度南に偏している。規模は長さ約3.7m以上、上幅約1.3m、深さ26cmである。

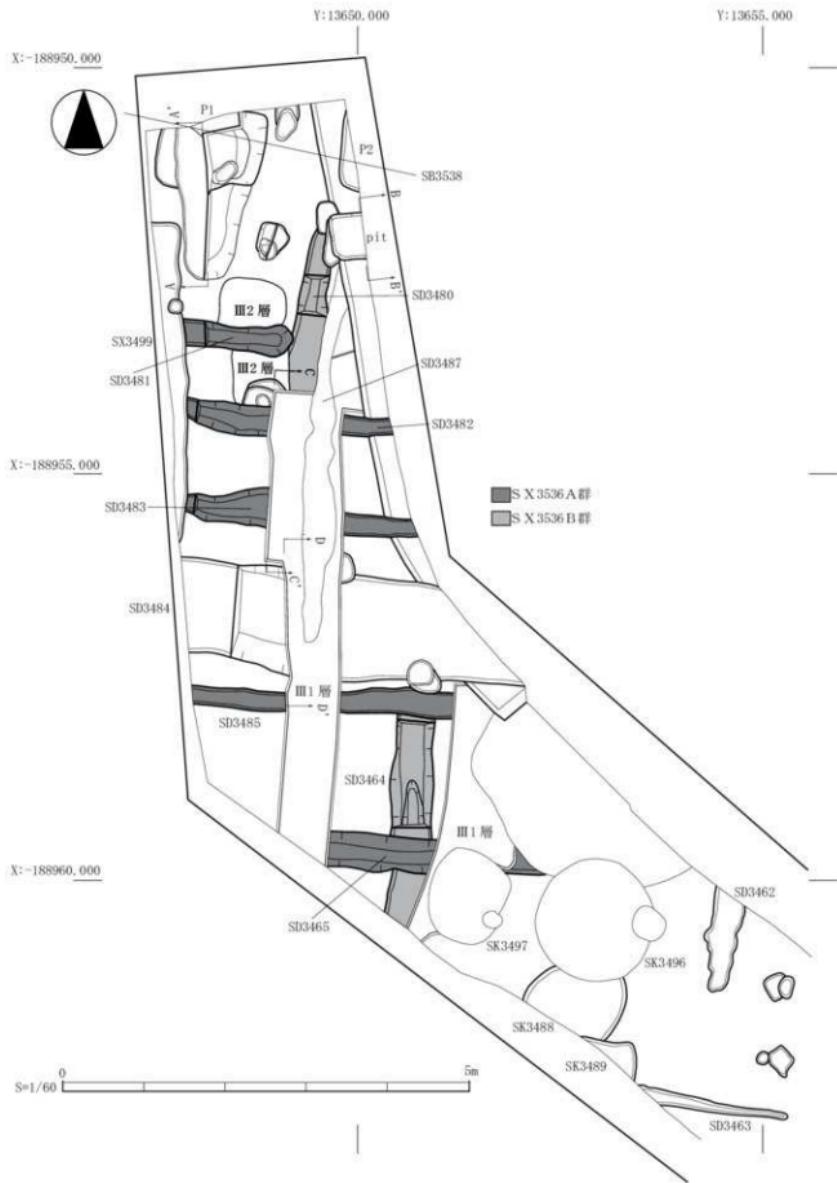
【埋土】3層に分けることができる。1層は黒褐色粘土、2層は黒褐色土をブロック状に含む褐灰色土、



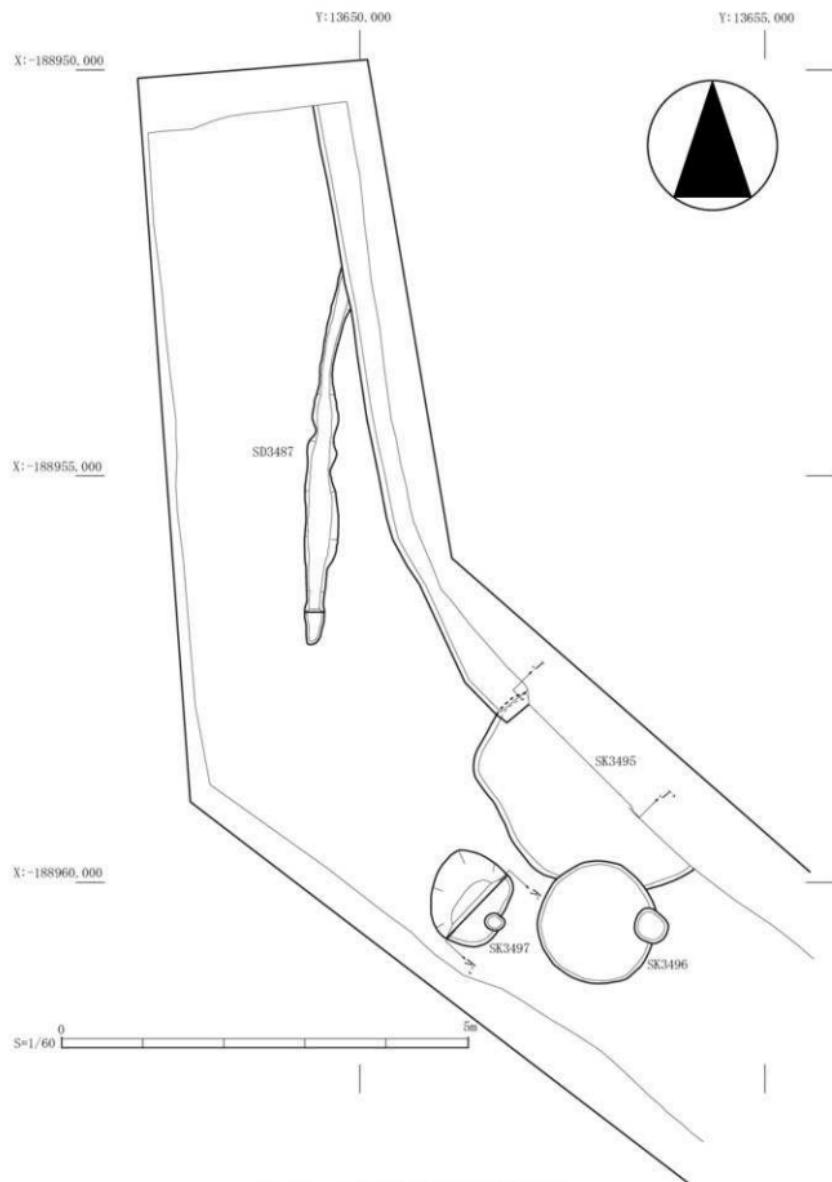
第4図 1区検出遺構



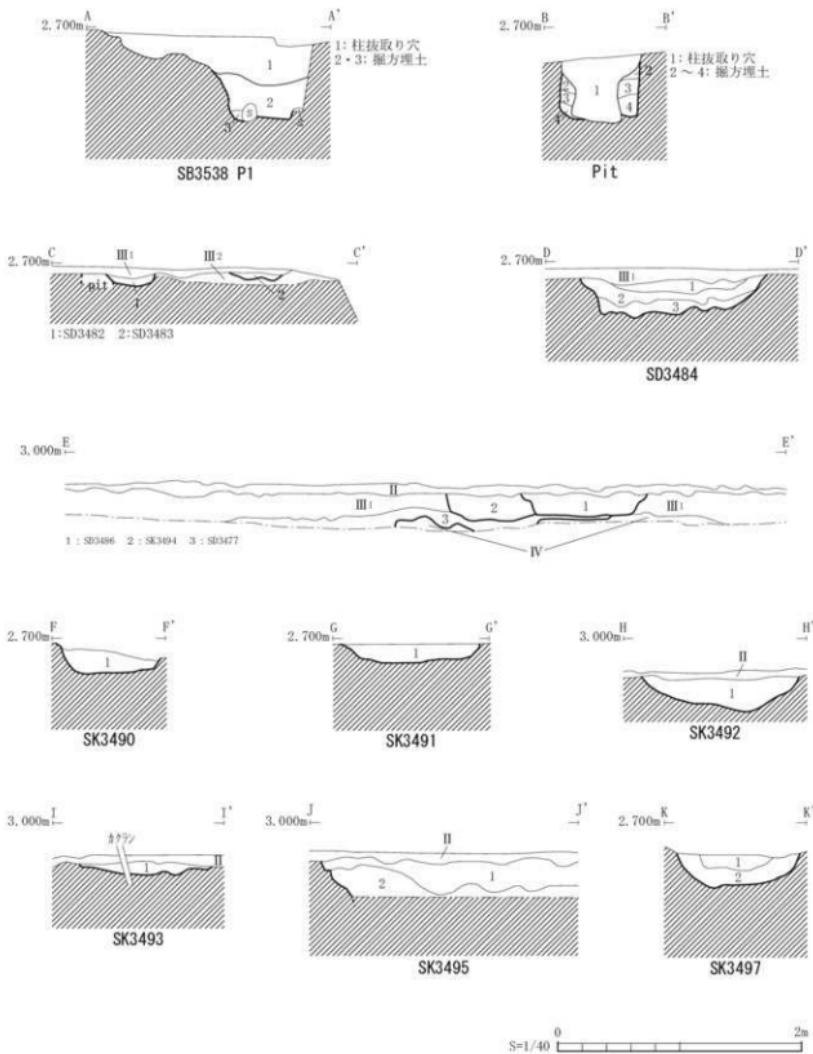
第5図 1区東半部検出遺構



第6図 1区西半部Ⅲ2・Ⅳ層上面検出構造



第7図 1区西半部III 1層上面検出遺構



第8図 1区検出遺構断面図

3層はにぶい褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

S K3539土壤（第5図）

【位置】調査区東側で発見した。南側は調査区外に延びる。

【平面形・規模】平面形は円形をなし、規模は東西85cmである。

【遺物】出土していない。

S X3537小溝群（第5図）

【位置】1区東側で発見した東西方向と南北方向の溝跡で構成される小溝群である。方向及び重複関係から、A群（南北方向の溝）→B群（東西方向の溝）の2時期の変遷を確認した。

【重複】S D3466・3476・3478・3479、S K3539、S X3498と重複し、S D3466よりも新しく、それ以外よりも古い。

・A群（S D3467・3468・3469・3470・3471）

【方向・規模】方向は北で約9～13度東に偏している。規模は、長さは最大のS D3467で1.4m以上、上幅35～46cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に多く含む黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

・B群（S D3472・3473・3474・3475・3477）

【方向・規模】方向は東で約36～42度南に偏している。規模は、長さは最大のS D3473で3.5m以上、上幅20～40cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に含む黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

S D3476溝跡（第5図）

【位置】調査区東端に位置する東西方向の溝跡であり、東側は調査区外に延びる。

【重複】S D3467・3468・3469・3475よりも新しい。

【方向・規模】方向は東で約36度南に偏している。規模は長さ2.1m以上、上幅50～89cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に含む黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

S D3478溝跡（第5図）

【位置】調査区東側に位置する南北方向の溝跡であり、南側は調査区外に延びる。

【重複】S D3474よりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約15度西に偏している。規模は長さ1.1m以上、上幅62cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に含む黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

S D3479溝跡（第5図）

【位置】調査区東側に位置する南北方向の溝跡である。

【重複】S D3474よりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約20度東に偏している。規模は長さ1.5m、上幅15cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に多量に含む黒色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S K3488土壤（第6図）

【位置】調査区中央に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【重複】SK3489よりも古い。

【平面形・規模】平面形は円形であり、規模は直径約1.0mである。

【埋土】炭化物を若干含む黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

S K3489土壤（第6図）

【位置】調査区中央に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【重複】SK3488よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は方形と考えられ、規模は東西63cm以上、南北30cm以上である。

【遺物】出土していない。

III2層上面検出遺構

S X3536小溝群（第6図）

【位置】1区西側で発見した東西と南北方向の溝跡で構成される小溝群である。方向及び重複関係から、A群（南北方向の溝）→B群（東西方向の溝）の2時期の変遷を確認した。

【重複】SX3499よりも古い。

・A群（SD3464・3480）

【方向・規模】方向は北で約3～14度東に偏している。規模は、長さは最大のSD3464で2.6m以上、上幅30～54cm、下幅12～17cm、深さ9～11cmである。

【埋土】炭化物を多く含む灰色土層である。

【遺物】出土していない。

・B群（SD3465・3481・3482・3483・3485）

【方向・規模】方向は東で約3～7度南に偏している。規模は、長さは最大のSD3485で3.2m以上、上幅30～48cm、下幅16～18cm、深さ6～27cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に多量に含む黒色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S X3499（第6図）

【位置】調査区西側に位置しており、北辺と東辺の一部以外は調査区外に延びる。

【重複】SD3481～3483よりも新しい。

【平面形・規模】溝状あるいは隅丸方形と考えられるが、調査区外のため詳細は不明である。規模は長さ3.3m以上、上幅28cm以上である。

【遺物】出土していない。

Ⅲ1層上面検出遺構

S D3486溝跡（第5図）

【位置】調査区東側に位置する南北方向の溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びる。

【重複】SK3490よりも古く、SK3494よりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏している。規模は長さ2.3m以上、上幅62cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に含む黒褐色粘質土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。

【遺物】1層から第14図-2に示した土師器壺（B I c類）のほか、土師器甕（B類）、須恵器壺が出土している。

S D3487溝跡（第7図）

【位置】調査区西側に位置する南北方向の溝跡であり、北側は調査区外に延びる。

【方向・規模】方向は北で約3度東に偏している。規模は長さ3.7m以上、上幅1.3m、下幅79cm、深さ25cmである。

【埋土】炭化物を多量に含む黒色粘質土である。

【遺物】出土していない。

SK3490土壤（第5図）

【位置】調査区東側に位置している。

【重複】SD3486よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は円形であり、規模は直径82cm、深さ約12cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面もおよそ平坦である。

【埋土】炭化物とIV層の灰黄褐色砂ブロックを多く含む極暗褐色粘質土である。

【遺物】埋土から土師器壺・甕（B類）、須恵器壺（I類）、平瓦が出土している。

SK3491土壤（第5図）

【位置】調査区東側に位置している。

【平面形・規模】平面形は南東隅が南側に張り出す不整隅丸方形であり、規模は南北約95cm、東西1.0m、深さ約12cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面もおよそ平坦である。

【遺物】埋土から第14図-4に示した土師器甕（B類）や5に示した土製紡錘車のほか、土師器壺（B II類）・甕（A・B類）、須恵器壺が出土している。

SK3492土壤（第5図）

【位置】調査区東側に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【平面形・規模】平面形は不整形であり、規模は南北約76cm、東西1.3m、深さ約17cmである。

【壁・底面】壁は非常に緩やかに立ち上がっており、底面にはやや凹凸がある。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂ブロックと炭化物を多く含む黒褐色粘質土である。

【遺物】埋土から第14図-3に示した土師器甕（B類）のほか、土師器壺（B類）・高台付壺（B類）・甕（B類）、須恵器壺・甕、平瓦が出土している。

SK3493土壤（第5図）

【位置】調査区東側に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【平面形・規模】平面形は不整円形もしくは不整楕円形と考えられるが、調査区外のため詳細は不明である。規模は南北59cm以上、東西88cm以上、深さ約5cmである。

【遺物】埋土から土師器坏（B V類）・甕（B類）、須恵器坏（V類）・甕・瓶が出土している。

S K3494土壤（第5図）

【位置】調査区東側に位置しており、北側は調査区外に延びる。

【重複】S D3486よりも古い。

【平面形・規模】平面形は円形もしくは楕円形と考えられるが、詳細は不明である。規模は南北約60cm以上、東西約77cm以上である。

【壁・底面】壁はやや急に立ち上がっており、底面には凹凸がある。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に含む極暗褐色粘質土である。

【遺物】埋土から土師器坏（B類）・甕（B類）、須恵器坏（V類）・瓶が出土している。

S K3495土壤（第7図）

【位置】調査区中央に位置しており、北東側は調査区外に延びる。

【重複】S K3496よりも古い。

【平面形・規模】平面形は円形と考えられ、規模は直径3.1mである。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がってている。底面は掘りきっていなため不明である。

【埋土】2層に分けることができる。1層は層の上方に灰白色火山灰をブロック状に含む黒褐色粘質土、2層はIV層の灰黄褐色砂をブロック状に多量に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S K3496土壤（第7図）

【位置】調査区中央に位置している。

【重複】S K3495よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は円形であり、規模は直径50cmである。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂の小ブロックと炭化物を多量に含む黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

S K3497土壤（第7図）

【位置】調査区中央に位置している。

【平面形・規模】平面形は不整円形であり、規模は直径37cmである。

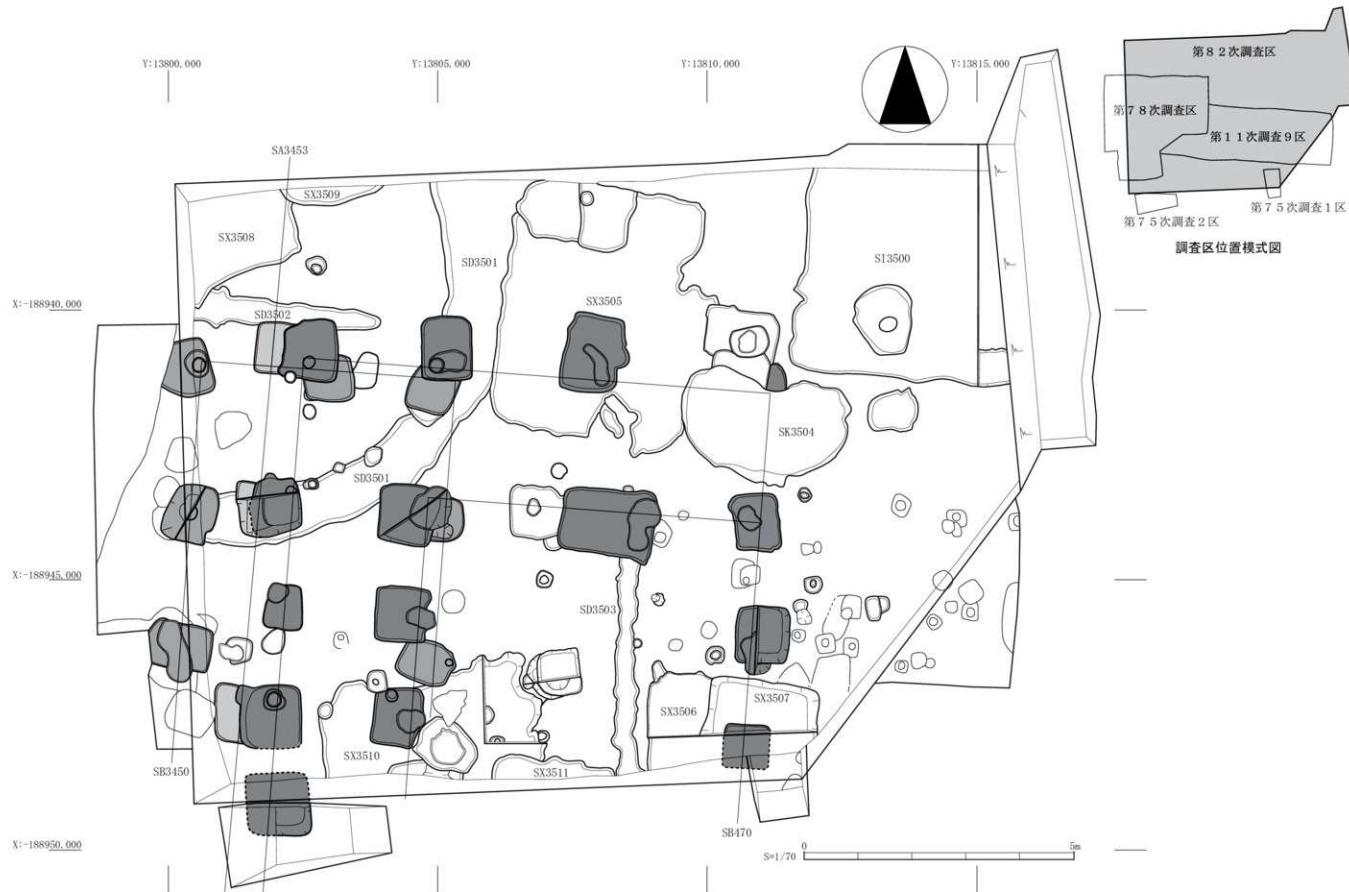
【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がっており、底面もおよそ平坦である。

【埋土】2層に分けることができる。1層は炭化物を多量に含む黒褐色土、2層はIV層の灰黄褐色砂をブロック状に多量に含む暗褐色土である。

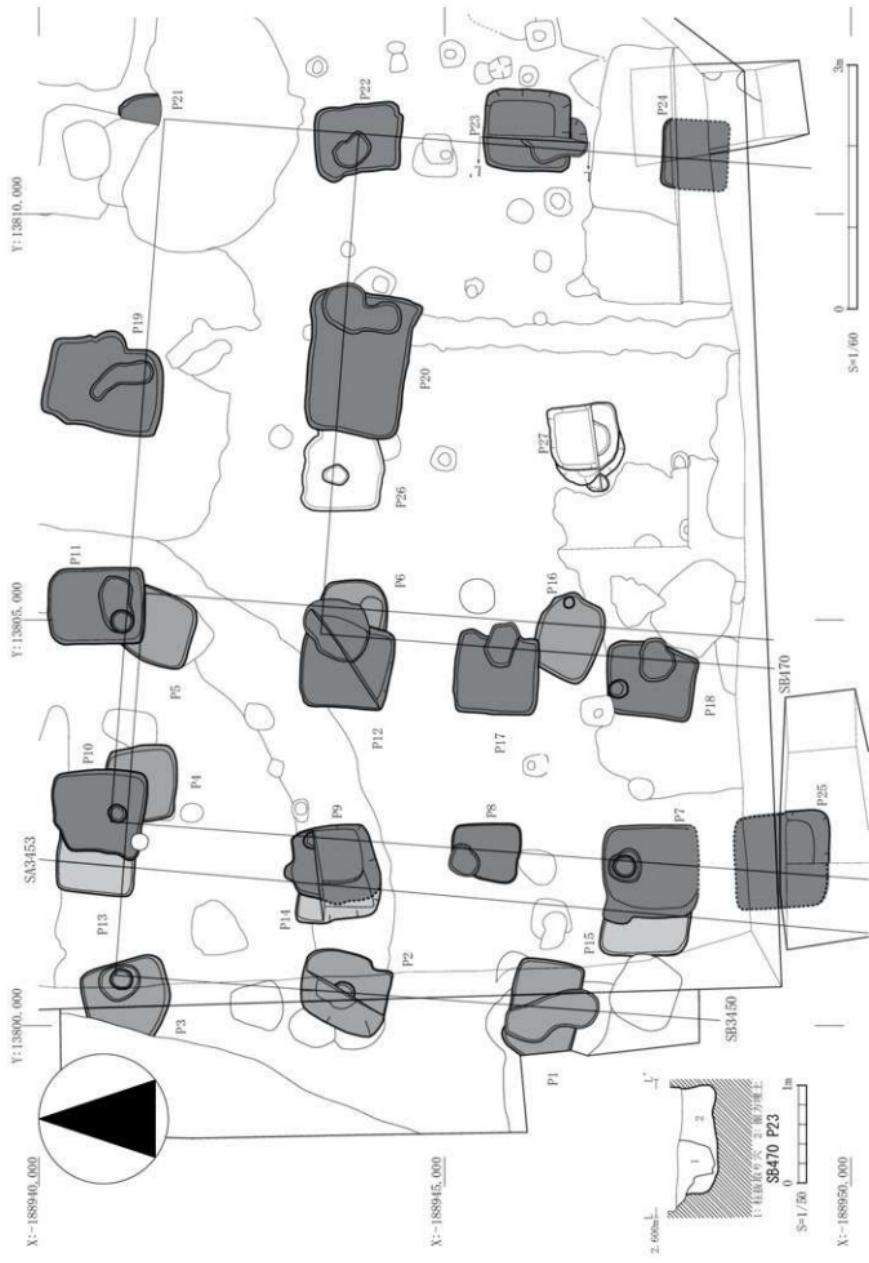
【遺物】出土していない。

3 2区で発見した遺構と遺物

2区では、IV層上面で掘立柱建物跡2棟、柱列跡1条、竪穴住居跡1棟、溝跡3条、土壤1基、性格不明遺構7基を発見した（註1）。



第9図 2区検出遺構



第10図 SB 470・3450掘立柱建物跡、SA 3453柱列跡

S B3450掘立柱建物跡（第10図）

【位置】2区の西側に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【桁行・梁行】桁行3間以上、梁行2間の南北棟建物跡である。（註2）

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は11・75・78次調査を含めて7基（P 1～6、16）検出しており、P 2・3で柱痕跡、P 1・6で柱抜取り穴を確認した。

【重複】S B470よりも古く、SD 3501・3502、SX 3510よりも新しい。

【方向・規模】方向は西側柱列で測ると、北で約4度東に偏している。規模は、桁行が西側柱列で5.4m以上、柱間は北から2.84m、約2.6mである。梁行は北妻で4.8m、柱間は西から約2.4m、約2.4mである。

【掘方の平面形・規模・埋土】平面形はおよそ方形を基調とし、規模は西側柱列の北より1間目柱穴間で測ると、長辺1.1m、短辺0.9m、深さ40cmである。掘方埋土は2層に分けることができる。1・2層とも地山ブロックが多量に混入する黒褐色砂質土であり、1層には炭化物粒がわずかに混入している。

【柱痕跡の形状・規模・埋土】直径25～28cmの円形であり、埋土は褐灰色粘質土である。

【柱抜取り穴の形状・規模・埋土】掘方の中心付近を大きく壊しており、埋土は炭化物が混入する黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S B470掘立柱建物跡（第10図）

【位置】2区のほぼ全域に展開し、調査区の南西寄りに位置している。南側は調査区外に延びる。

【桁行・梁行】桁行4間以上、梁行3間であり、北及び西に廟がつく掘立柱建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は第11・75・78次調査を含めて15基（P 7～12・17～24）検出しており、P 7・9・10・11で柱痕跡、P 8・12・17・18・19・20・22・23で柱抜取り穴を確認した。

【重複】SK 3504より古く、S B3450、SA 3453、SD 3501・3502・3503、SX 3505・3507・3510よりも新しい。

【方向・規模】方向は西側廟柱列で測ると、北で約4度32分東に偏している。規模は、桁行が西側柱列で約8.2m以上であり、柱間は北から2.50m、約1.8m、約2.0m、約1.9mである。梁行は北妻で約8.7mであり、柱間は西から2.47m、約3.1m、約3.1mである。

【掘方の平面形・規模・埋土】平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形である。規模は、東側柱列北より2間目柱穴では長辺1.1m、短辺1.0m、深さ47cmである。埋土はIV層の灰黄褐色砂質土を主体とし、黒褐色砂質土が薄い層状に混入する。

【柱痕跡の形状・規模・埋土】直径20～26cmの円形であり、埋土は黄灰色粘土である。

【柱抜取り穴の形状・規模・埋土】掘方の壁面を壊しており、埋土は東側柱列北より2間目柱穴ではIV層の灰黄褐色砂質土を多量に含む黒褐色砂質土である。

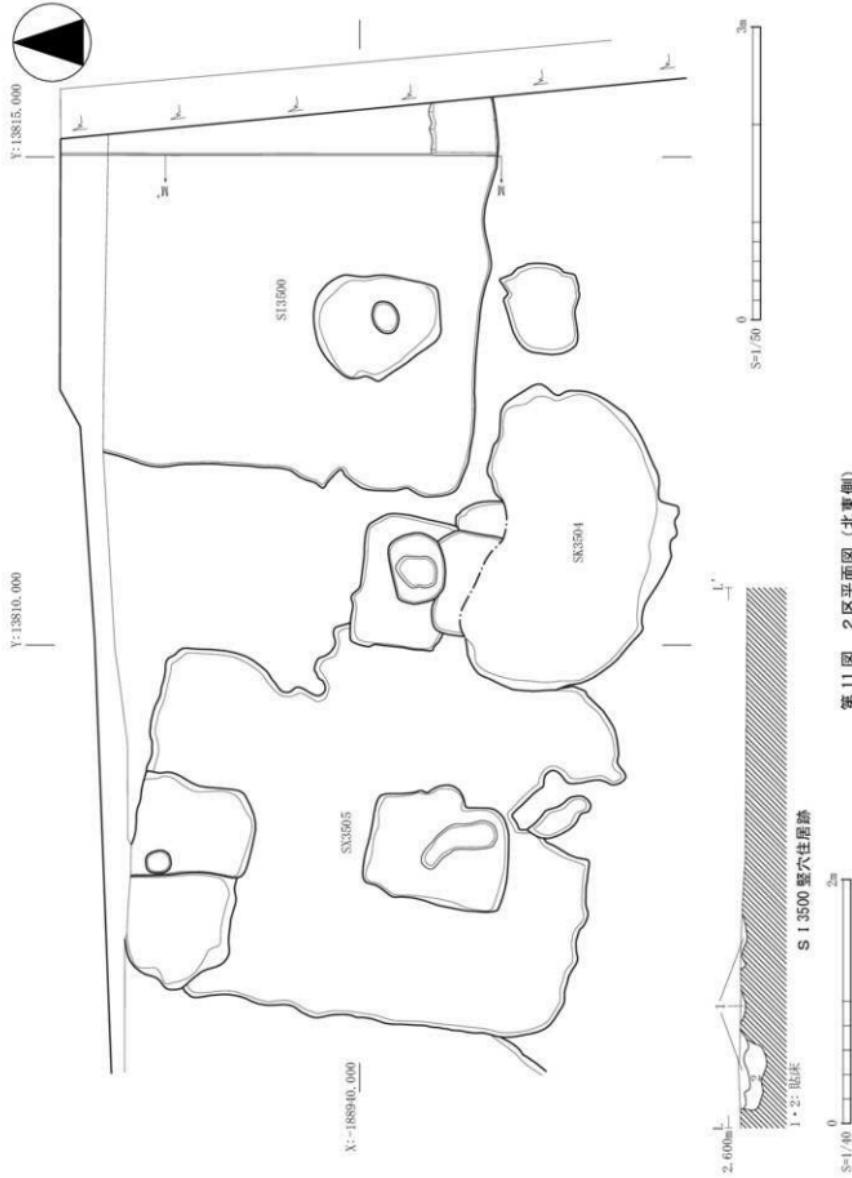
【遺物】P 22の検出面から土師器壺（B類）、須恵器壺・瓶、P 23柱抜取り穴から土師器甕、須恵器杯、甕が出土している。

S A3453柱列跡（第10図）

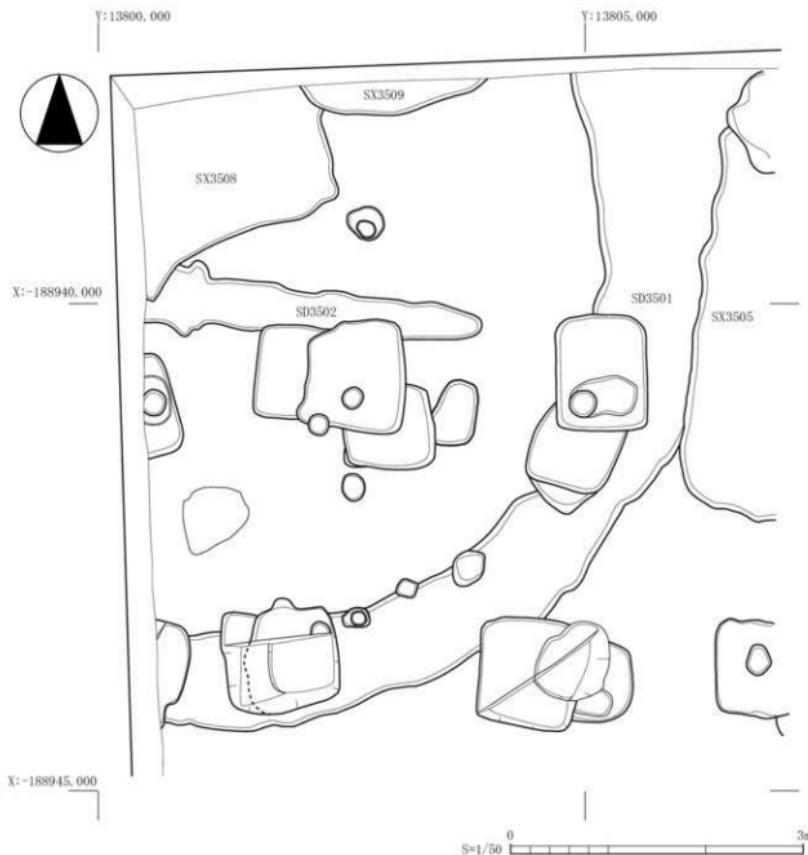
【位置】調査区西部に位置しており、北側と南側は調査区外に延びる。

註1：掘立柱建物跡や柱列跡に関して、今回の調査で精査できなかった部分については第75・77・78次調査の成果を再録しつつ記載している。また、今回の調査で新たに発見した柱穴を踏まえ、改めて柱筋を推定したため、第78次調査とは規模と方向が若干異なる。

註2：第75・77・78次調査では、東西3間以上、南北3間以上と報告している。



第 11 図 2 区平面図 (北東側)



第12図 2区平面図（北西側）

【柱穴】南北方向に並ぶ3基の柱穴を検出した。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱痕跡、柱抜取り穴とともに確認できない。

【重複】SB470よりも古く、SD3501・3502よりも新しい。

【規模】柱間は北より約3.0m、約3.8mである。

【掘方の平面形・規模・埋土】北より1間目の柱穴で見ると、規模は南北1.0m以上、深さ50cmである。掘方の埋土は3層に分けることができる。1層は褐色砂質土、2層は黄灰色粘質土、3層は灰色砂質土であり、いずれにも地山ブロックが多量に混入している。

【遺物】出土していない。

S I 3500竪穴住居跡（第11図）

【位置】北東側に位置しており、北側は調査区外に延びる。また、東側は擾乱により壊されている。

【残存状態】上部はほとんど削平されており、貼床のみが残存している。また、東側は搅乱により壊されている。

【平面形・方向】平面形は隅丸方形である。方向は西辺で測ると北で約8度東に偏している。

【規模】東辺が3.5m以上、南辺が4.1m以上である。

【床面の状況】貼床は2層確認できた。1層は炭化物を含む暗褐色砂質土であり、部分的に堆積している。

2層にはぶい黄褐色砂であり、溝状にめぐると考えられる。

【遺物】1層から土師器甕（B類）、須恵器瓶が出土している。

S D3501溝跡（第12図）

【位置】調査区北西側に位置する南北方向の溝跡であり、北側と西側は調査区外に延びる。

【重複】S B470・3450、S A3453よりも古い。

【平面形・規模】平面形は、半径約5.5mの円弧状である。規模は長さ3.5m以上、上幅51cmである。

【遺物】出土していない。

S D3502溝跡（第12図）

【位置】調査区北西側に位置する東西方向の溝跡であり、西側は調査区外に延びる。

【重複】S B470、S A3453、S X3508・3509よりも古い。

【方向・規模】方向は東で約6度南に偏する。規模は長さ4.0m以上、上幅40cmである。

【遺物】出土していない。

S D3503溝跡（第13図）

【位置】調査区中央南側に位置する南北方向の溝跡であり、南側は調査区外に延びる。

【重複】S B470よりも古い。

【方向・規模】方向はほぼ真北である。規模は長さ4.7m以上、上幅40cmである。

【遺物】出土していない。

S K3504土壤（第11図）

【位置】調査区東寄りに位置している。

【重複】S B470、S X3505よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は不整梢円形であり、規模は長軸約3.1m、短軸約1.8mである。

【遺物】検出面から土師器坏（B類）が出土している。

S X3505（第11図）

【位置】調査区中央北寄りに位置している。

【重複】S B470、S K3504よりも古く、S D3501よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は不整な隅丸方形であり、北東側と南側が凹む。方向は西辺で測ると北で約9度東に偏している。規模は南北約4.9m、東西4.0m以上である。

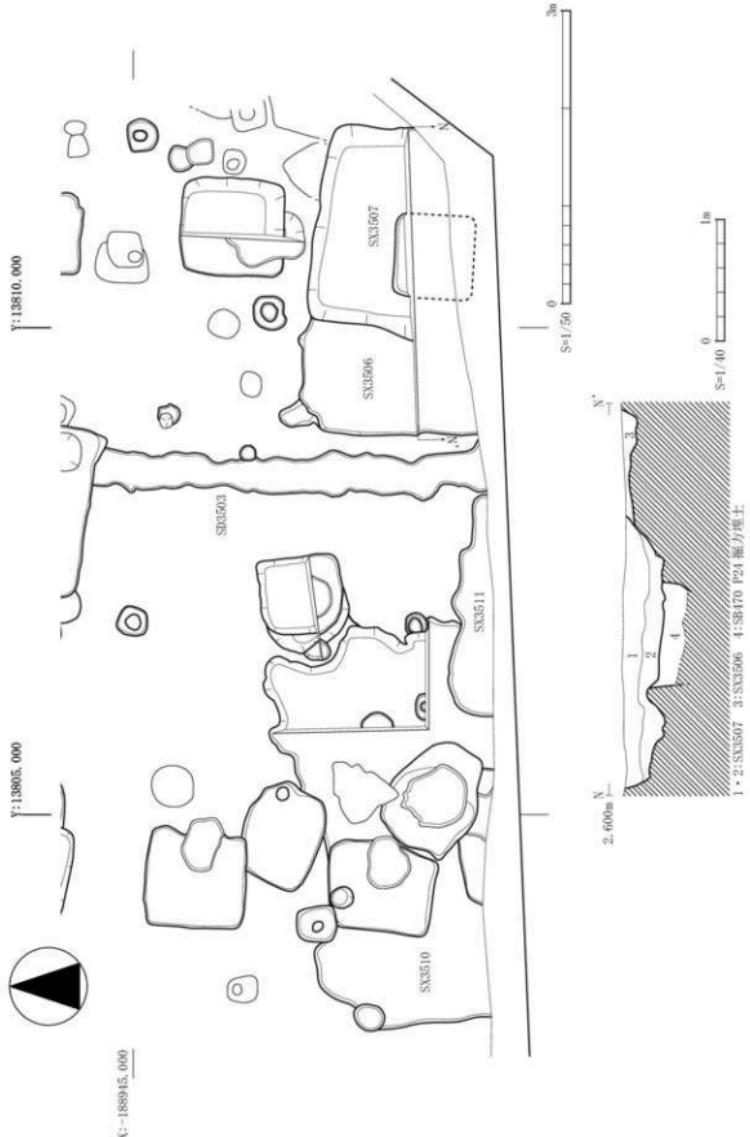
【遺物】出土していない。

S X3506（第13図）

【位置】調査区南東側に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【重複】S X3507よりも古い。

【平面形・規模】平面形は隅丸方形と考えられる。方向は西辺で測るとほぼ真北を向く。規模は南北約1.8m以上、東西1.1m以上である。



第13図 2区平面図③

【壁・底面】壁はやや外傾しながら立ち上がり、底面にはやや凹凸がある。

【埋土】IV層の灰黄褐色砂をブロック状に多量に含む黒褐色砂質土である。

【遺物】検出面から土師器壺（B類）、須恵器壺（I類）・甕・瓶、砥石が出土している。

S X3507（第13図）

【位置】調査区南東側に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【重複】S B470よりも古く、S X3506よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は隅丸方形と考えられる。方向は北辺で測ると東で約12度南に偏している。規模は南北約1.0m、東西2.0m以上、深さ約33cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がっており、底面には凹凸がある。

【埋土】2層に分けることができる。1層はIV層の灰黄褐色砂をやや多く含む黒褐色砂質土、2層はIV層の灰黄褐色砂をブロック状に多量に含む黒褐色砂質土である。

【遺物】検出面から土師器壺・甕（B類）、須恵器甕が出土している。

S X3508（第12図）

【位置】調査区北西隅に位置しており、北側と西側は調査区外に延びる。

【重複】S X3509よりも古く、SD3502よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は不整な隅丸方形と考えられ、規模は南北約2.0m以上、東西2.2m以上である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面もおよそ平坦である。

【埋土】黒褐色粘質土であり、にぶい黄色粘質土が小ブロック状に混入している。

【遺物】出土していない。

S X3509（第12図）

【位置】調査区北西隅に位置しており、北側は調査区外に延びる。

【重複】S X3508よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は円形もしくは梢円形と考えられ、規模は南北約40cm以上、東西1.9m以上である。

【遺物】出土していない。

S X3510（第13図）

【位置】調査区中央南側に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【重複】S B470・3450、S X3511よりも古い。

【平面形・規模】平面形は不整な方形と考えられる。方向は西辺で測ると北で約6度西に偏している。規模は南北約2.3m以上、東西4.1mである。

【遺物】埋土から土師器壺（B類）が出土している。

S X3511（第13図）

【位置】調査区中央南側に位置しており、南側は調査区外に延びる。

【重複】S X3510よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は隅丸方形の可能性もあるが、大部分が調査区外であるため、詳細は不明である。規模は南北40cm以上、東西2.3m以上である。

【遺物】検出面から土師器壺、甕、須恵器甕、平瓦が出土している。

IV まとめ

1 1区検出遺構について

(1) III1層の堆積時期と上面検出遺構について

III1層からは、土師器壺(A・B I・B II・B V類)・高台付壺・甕(A・B類)、須恵器壺(II・III・V類)・甕・瓶、平瓦、灰釉陶器が出土している。このうち、底部調整が分かる壺類の点数について、土師器はA類が1点、B I c類が1点、B II類が3点、B V類が2点、須恵器はII類が1点、III類が4点、V類が4点である。出土点数が少ないため詳述はできないが、①土師器に関してはA類とB類が共伴しB類が主体となること、②土師器壺B類については底部切り離し後に再調整を施したB I・B II類の割合が高いこと、③須恵器に関しては底部切り離し後に無調整のIII・V類が主体となることが指摘できる。これら壺類の法量については、土師器の底径／口径が0.44～0.56、須恵器の底径／口径が0.39～0.67となる。

こうした出土状況と類似する土器群としては、市川橋遺跡S X1351D・3層やSD1522出土土器群が挙げられる(多賀城市教育委員会2003)。このうち、SD1522出土壺類の特徴を見ると、①土師器壺はA・B類が出土しており、A類が極めて少ない、②土師器壺B類は底部切り離し後に再調整を施したB I・B II類が多い、③須恵器壺は底部切り離し後に無調整のIII・V類が多数を占めるなどがあり、III1層出土土器と類似した傾向と言える。また、壺類の法量を見ると、S X1351D・3層出土壺類については、土師器は底径／口径が0.44～0.57であり、須恵器は底径／口径が0.44～0.60である。SD1522出土壺類については、土師器は底径／口径が0.38～0.64、須恵器は底径／口径が0.37～0.75であり、須恵器に関しては1点を除き0.65内に収まる。これらの数値から、おおむねIII1層とS X1351D・3層やSD1522出土壺類の底径／口径の比率が類似していると判断できるだろう。

よって、III1層はS X1351D・3層やSD1522と同様に9世紀前葉から中葉頃に比定することができ、III1層上面検出遺構は9世紀中葉以降の年代が考えられる。特にSK3495は埋土上部に灰白色火山灰がブロック状に含まれていることから、10世紀前葉以降に埋没したものと考えられる。

(2) III2・IV層上面検出遺構について

III2層は調査区西側のみに部分的に堆積する薄い層であり、この層に覆われる遺構もないことから、III2層とIV層上面検出遺構は同時期の可能性がある。III1層が9世紀前葉から中葉頃の堆積層であることから、それに覆われるIII2層とIV層上面検出遺構は9世紀前葉以前のものと考えられる。このうち、SD3461からは土師器甕B類が出土していることから、8世紀後葉以降の年代が推定できる。

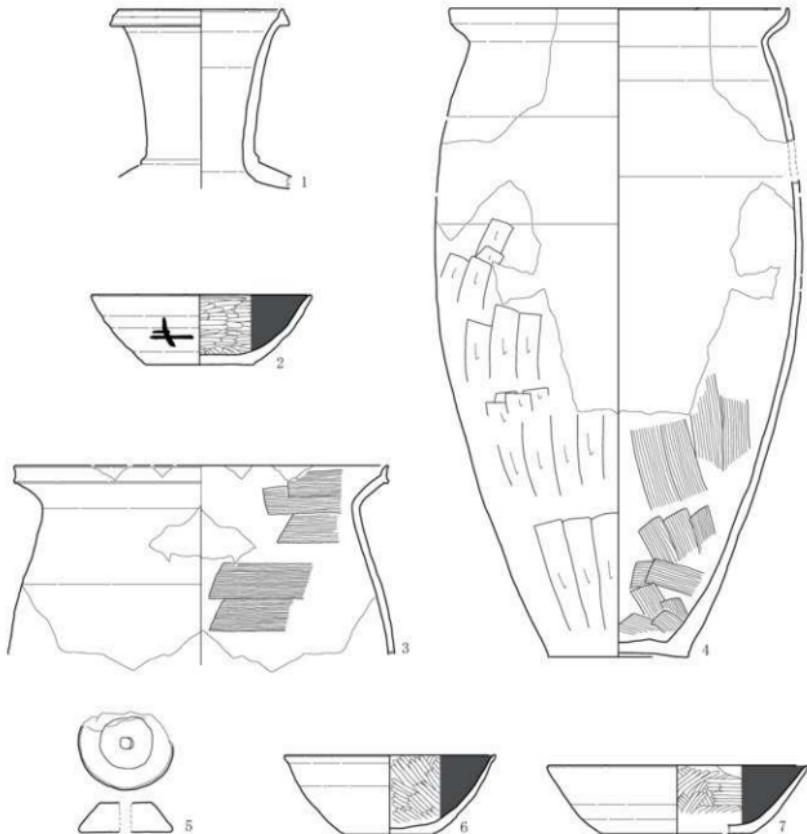
2 2区検出遺構について

S B470とS B3450に関しては、75・78次調査以降新たな見解を見出すことができるような遺物が出土していないため、S B3450は8世紀後葉から9世紀初頭、S B470は9世紀初頭以降という年代観(多賀城市教育委員会2011)に変更はない。これらの遺構を軸として重複関係を見ると、SK3504はS B470よりも新しいことから9世紀初頭以降の年代が考えられる。SD3501・3502、S X3510はS B3450よりも古いことから8世紀後葉以前と考えられる。

また、SI3500は貼床から、S X3510は埋土から土師器甕B類が出土していることから、8世紀後葉以降のものと考えられる。

参考文献

- 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－第11次調査－』多賀城市文化財調査報告書第50集 1998
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡1－平成21年度ほか発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第102集 2011



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器 瓶	SD3462 1層	ロクロナデ	ロクロナデ	10.0 20/24	—	—		R21	
2	土師器 壺	SD3486 1層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	13.3 24/24	6.7 24/24	4.3	6-1	R2	体部外面墨書き
3	土師器 壺	SK3492 1層	ロクロナデ	ロクロナデ、ハケメ	(22.8) 6/24	—	—		R12	
4	土師器 壺	SK3491 1層	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ハケメ	20.6 22/24	8.6 24/24	39.9		R20	
5	土製品 防護車	SK3491 1層	最大径: 5.9cm、最小径: 3.2cm、穿孔部径: 0.7cm、厚さ: 1.8cm、重量: 55g						R14	
6	土師器 壺	2区 P27 掘方埋土	ロクロナデ 底部: 回転条切り	ヘラミガキ、黒色処理	(12.7) 3/24	(5.5) 10/24	4.9		R17	
7	土師器 壺	SK3504 1層	ロクロナデ 底部: 不明	ヘラミガキ、黒色処理	(15.7) 3/24	(9.2) 10/24	4.2		R16	

第14図 出土遺物



1区東側IV層上面遺構検出状況（北東より）



1区中央遺構検出状況（南より）

写真図版 1



1区北西側Ⅲ層上面遺構検出状況（北西より）



1区南西側Ⅲ層上面遺構検出状況（北西より）

写真図版2



1区東側Ⅲ層上面遺構検出状況（北西より）



1区東側Ⅲ層上面遺構掘り下げ状況（北東より）

写真図版3



2区遺構検出状況（北西より）



2区遺構検出状況（東より）



S B3538・P 1 堀り下げ状況・断面（北東より）



2区Pit23堀り下げ状況・断面（東より）

写真図版5



土師器・坏（S D3486出土）



須恵器・坏（III層出土）

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき 1							
書名	多賀城市内の遺跡 1							
副書名	平成23年度発掘調査報告書 市川橋遺跡第82次調査							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第116集							
編著者名	小原 一成							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 TEL : 022-368-0134							
発行年月日	西暦2014年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市川橋遺跡 (第82次)	宮城県多賀城市 市川字鎧前地内	042099	18008	38度 17分 49秒	140度 59分 27秒	2011.11.08 ? 2011.12.07	260m ²	中央公園施設整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市川橋遺跡 (第82次)	集落・都市	古代	掘立柱建物跡 堅穴住居跡 溝跡 土壙	土師器 須恵器 瓦 土製紡錘車				
要約	<p>市川橋遺跡は、市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川東岸に形成された、標高2~3mの微高地上に位置している。遺跡の範囲は、東西約1,100m、南北約750mに達する。道路跡、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、井戸跡、区画溝など多数の遺構が検出されている。これらは、多賀城政庁中軸線上に造られた南北大路と多賀城外郭南辺築地に平行する東西大路を基準とし、これらの道路に沿って1町四方に区画された方格地割りを形成している。本遺跡南半部はこの幹線道路の交差点にあたり、周辺では規則的に配置された大規模な建物群や四面庇付建物が発見されるなど、城外で最も重要な地区であると考えられる。</p> <p>今回の調査では、掘立柱建物跡2棟、柱列跡1条、堅穴住居跡1棟、溝跡12条、小溝群2箇所、土壙9基などを発見した。南北大路に近接している調査区では大規模な掘立柱建物跡や堅穴住居跡が分布し、大路から離れた調査区では小溝群が分布している。大路沿いとそこから離れた箇所での土地利用の違いを確認することができた。</p>							

多賀城市文化財調査報告書第116集

多賀城市内の遺跡 1

一平成23年度発掘調査報告書一

市川橋遺跡第82次調査

平成26年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
宮城県多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368-0134

発行 多賀城市教育委員会
宮城県多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368-1141

印刷 株式会社 工陽社
宮城県塩竈市尾島町8番7号
電話（022）365-1151

